

前回に引きつゞき十章十二―二一節の研究であるが、この場所は短き語の中に無量の眞理を含ませた處である故文章としては不備の點多く、全部を正確に了得することは中々困難である、邦改語譯聖書は在來の譯より正確である故之を參考とする事は少からず理解を助けるのである、又前回に説きし如く（第一）人類の一體なること（第二）神は人類に對するに其代表者を以てし給ふこと、此二つの眞理は先づ心に貯へて置かねばならぬ。

十四節の最後に「アダムは即ち來らんとする者の模かたなり」と云ふ句がある、「來らんとする者」とはキリストを指す、即ちアダムとキリストとが人類の二大代表者であると云ふのである、神は人類中の最上なる者を其代表として選給ふたのである、そしてパウロの茲に説く所は、大體に於て左の二つに分つことが出来る。

第一、アダムはキリストの模かたである、アダム一人の墮罪より人類に罪と死が及んだ、同様に、キリスト一人の義によりて義と生とが人類に及んだ、甲は死の源であり乙は生の源である、此の意味に於て二人の人類に對する關係は酷似してゐる。

第二、併し乍ら此二人の對人類關係に於て相異なる點も亦ある、その相違點を大凡左の三項である。

（イ） アダムは純然たる人である、然るにキリストは神が其獨子ひとりごを人の容かたちに於て世に降したものである。

（ロ） アダムに因る人類の死は神の審判より出でたものであるが、キリストに因る人類の救は神の憐愍れんみんより出でたものである。

(ハ) アダムのために人類に臨んだものは死であるが、キリストのために人類に臨んだ者は永生である。

かくアダムとキリストとは似て居つて而かも大に相違してゐる、そしてその相違は實に根本的の相違である、甲より出で來つた者は罪と死——永への詛ひである、然るに乙より出で來つたものは此永久の詛ひを打ち破る義と生と永久の祝福とである、似て居るが故に前者を眞理として受ける者は後者をも眞理として受けねばならぬ、又相違せるが故に甲に因る我等の死が乙に因る生に依て打ち摧かるゝに相違ない、されば我等の救は確實である、人々よ早く來つて此救を受けよとパウロは勧めるのである(右の第一の類似點を説くが十二—十四節、第二の相違點を説くが十五—二十一節である)。

之はパウロ神學なれば我等の關する所にあらずと云ふ人がある、併しそは大なる誤りである、先づ我等は舊約聖書に於て左の如き語に接するのである。

我れエホバ汝の神は嫉む神なれば、我を惡む者に向ひては父の罪を子に報いて三四代に及ぼし、我を愛し我誠命を守る者には恩恵を施して千代に至るなり。(出埃及記二十章五、六節)

エホバを畏るゝ者にエホバの賜ふその憐憫は大にして天の地よりも高きが如し、その我等より愆を遠ざ給ふことは東の西より遠きが如し。(詩百〇三篇十一、十二節)

エホバに感謝せよ、エホバは恩恵ふかく、その隣愍はとこしへに絶ゆることなし。(詩百十八篇一節)

その怒りは暫時にてその恵みは生と共に永し、夜は夜もすがら泣き悲しむとも朝には喜びて歌はん(詩三十

篇五節)

我れし^{△△△}ばし^{△△△}汝を棄てたれど大なる憐愍^{△△△}をもて汝をあつめん、我が忿恚^{いかり}あふれて暫く我が面を汝に隠したれど永遠^{△△△}の恩恵をもて汝を憐まんと、こは汝を贖ひ給ふエホバの聖言^{おことば}なり。(イザヤ書五十四章、七節、八節)

以上の五つは最も代表的なものであるが他にも之に類似せる語句は無数にある、雅各書^{ヤコブ}二章十三節の語を以てすれば是れ「憐愍^{あはれみ}は審判^{さばき}に勝つなり」である、審判はもとより無くてはならぬ、しかし憐愍は審判以上に在る、審判は三四代に及び恩恵は千代に及ぶ、怒は暫時にして憐愍は永久である、神もとより怒りと罰を與へ給はねばならぬ、併し彼は怒りと罰に熱心ではなくして是れ已むを得ざるに出でしもの、そして憐愍と恩恵については眞に燃ゆるが如き熱心を起し給ふのであると、これ舊約時代よりの明かなる教である。

神の此心は今の人間の心と正反對である、憤る事、責むる事、毀^こつ事には全精力を盡すも、赦す事、忍ぶ事、建つる事には充分の力を用ひない、凡ての惡に對しては熱心を燃やすも善に對しては最も冷淡である、これ人類墮落の有力なる證據とも云ふべき者である、如此^{【かく】}此人の心と神の心とは全く違ふ、神は怒ること遅くして、恵むこと早い、彼は責むるに熱心ならずして赦すに熱心である、故に今日の人と雖も神を信じて聖靈を心に迎ふるに至れば、亦善に對して熱心にして惡に對して嫌厭^{けんえん}たり得るのである。

この神の心を知りて我等は十五節を讀まねばならぬ、「されど罪のことは恩賜^{たまもの}のことの如きにならず、もし一人の罪によりて死ぬる者多からば、まして神の恵と一人のイエスキリストに由れる恵の賜とは多くの人に溢^{あふ}れざらんや」と云ふ、神はアダム一人の罪の故に全人類に對するに審判を以てしたれども、これ已むを得ざるに出でたのであつて彼が此事に熱心であるからではない、彼が熱心はキリストに因^よる全人類の救にある、キリスト一

人の義の故に恵の賜が多くの人に溢るゝに至る、こゝに神の特別の熱心が注がれたのである、キリスト一人より全人類に生命の及んだといふ事は、神の此特別の性質を知れば決して不可解のことではない、これが了得しがたく思はるゝのは、人が自己の善に不熱心にして惡に熱心なる心を神に映して眺むるからのことである。

次に十六節は「賜は一人より來る罪の如きに非ず、そは審判は一つの罪より出でて罪せらるゝに至り、賜は多くの罪より出でて義とせらるゝに至る」と改譯すべき者である、前節同様アダムに因る審判とキリストに因る恩恵との對照である、甲は全人類の罪せらるゝに至りし事、乙は全人類の義とせらるゝに至りし事にて此兩者の間には天地の相違ありと云ふのである、即ち審判は一の罪を出發點として出で、賜は多くの罪を出發點として出でゝ救ひに至つたと云ふのである。

次の十七節は曰ふ「もし一人罪を犯しゝにより、死この一人に因つて王たらんには、まして溢るゝ恩恵と義の賜を受ける者は一人のイエスキリストにより生にありて王たらざらんや」と、此節の對照は死と生とである、一人のアダムの墮罪のため死の支配を受けるに至り、一人のキリストの義の故に生にあつて支配し得るに至る、死の支配を受けるゝと生にありて支配するゝと、その差は實に無限大である、アダムのために人類は死に支配せらるゝの不幸に會した、しかし神は第二のアダムとしてキリストを賜ふて、彼の義の故に彼を信ずる者には何人に限らず永生の幸福を與ふる道を拓き給ふた、神は罰するに熱心ではなく恵むに熱心である。

以上に於てアダムとキリストの比較は略ぼ明かになつたことと思ふ、まことにキリストの救は大なる救である、神もし人類の一人一人が義となる時初て永生をもて酬ゆるとならば、人生は永久の絶望たるほかないのである、

自分の罪を考へよ、又人類の罪を考へよ、その深きを思へよ、人いかで自ら完き義人たり得よう、各人自ら全き義を實現せずしては生命を與へられずとせば人は滅亡を其前途に期する外はない、さり乍ら神は憐むに熱心なる神である、故に其獨り子を人として世に降し、彼をして人類に代つて義を實現せしめ、彼れ義なるがため人類も亦義とせられて生を受くるに至る道を拓き給ふた、こゝに大なる恵があり又人類の據り所がある、この外に眞に救はるゝ道はない、従つて此外に眞に安心に入り得る道はない。

この義とせられて生を與へらるゝ恵みに入りて初めて又事實上義を行ひ得るに至るのである、即ち道德より信仰に入るにあらず信仰より道德に入るのである、義となりて義とせらるゝにあらず、義とせられて義となるのである、完き人として取扱はるゝ恵に入りて初めて完全に向て進むのである、故に第一に必要なことはイエスキリストを信ずることである、この信仰ありて義とせられ、義とせられて義となるのである、信仰！これ實に現代の最大缺乏物であつて又最大必要物である、如何にして此社會を救ふべきか、又如何にして個々の人を救ふべきか、それは孰れも信仰に依りてである、キリストに對する信從のある所、人も救はれ又社會も救はる先づ必要なる者は信仰である。

以上を以て第五章十二―廿一節の大意を説明し終つた、「リョウエン」 遼遠の古「イニシ」に於ける始祖アダム「ソウ」の墮落は遂に神の獨り子の降世を必要ならしめたのである、始祖の墮罪は人類の受けたる最も大なる創痍であつた、たゞ之を醫やして餘りあるキリストの救あつて我等の歡びは盡くる處を知らないものである、この兩者の對照をパウロは力強く記して我等に示すのである、今こゝに有名なるミルトンの『失樂園』(Paradise Lost)がアダム「ソウ」の墮落を如何に描き

しかを見よう、これ羅馬書五章の解釋を大に助くるものである。

ミルトンの『失樂園』は創世記第三章の詩的註解であつて、始祖墮落の最も深き説明と稱すべき者である、事は第六、七、八、九、十章に審^{つまひらか}らかである、先づサタンは蛇の形を取つてアダムとエバとを罪に陥^{おとし}れんとする、彼は男よりも欺き易き女を選び、エバに近よりて「美はしき創造者に似たる最も美はしき汝よ」と云ひて彼女に甘き諂^{へん}への語をかける、サタンは女の陥り易き虚榮心と好奇心の兩方よりエバを惑はさんとするのである、かくエバは先づ虚榮心に満足を與へられ、そして何故に蛇が人語を語り得るかとの疑問を起す、これ即ち好奇心の生む所である、蛇はエバが思ふ壺にはまつたのを喜んで或樹の果を食ひしため人語を解するに至つたと答へる、エバ好奇心に驅られて蛇を促し至り見れば果せるかなそれは禁ぜられてゐる樹の果であつた、蛇は云ふ、神が之を禁じたのは獸が之を食すれば人の如くなると共に人が之を食すれば神の如くなるからである、神は人が己れと等しき者となるを嫉み、永久に人を己に隸屬せしめんと欲して之を禁じたのである、故に之を食するは少しも差支ないのみか却て大なる幸福を持ち來すのであると、この巧みなる誘ひの語に惑はされて、エバは遂に知識の樹の果を食するに至るのである。

之を食し見れば案の錠^{じょう}心に言ひ知れぬ喜と新なる力とが臨んだ、彼女は此力を用ひてアダムと等しきもの又はアダムより優れた者と己を見做して、アダム^{△△△△△△△△△△}を下に抑えへようと云ふ心を起した、併し又思ひ直した、自分は既に禁令を犯したのである故多分罰として死を受くるのであらう、然る後はアダムには新らしき妻が與へられるであらう、これは堪へ難きことである、故に寧ろアダムを誘ひて同じ罪を犯さしむる方がよいと（男を屈服させよ

うと願ひながら又男に頼らねばならぬ女性の弱味が心理的に描かれてゐる、乃ち自己の墮罪をアダムに打ちあける、アダムは大に驚き又失望した、しかし女の愛にひかされて「汝なくしていかに我れ生くべきや」と遂に同じ罪を犯すに至つたのである。

かくして二人は遂に墮落した、二人は一時の歡樂より醒めて失ひし處のあまりに大なるに驚いた、墮落の状態のみぢめさが浸々しみじみと感ぜられた、アダムは殊に激しき失望に襲はれた、彼は二人の現狀について痛恨の呻きを發した、彼は鋭き批難の矢をエバに向け彼女の薄志を以て墮落の凡ての原因であると詰つた、エバは之に對してアダムの薄志弱行にして終に女の誘惑に勝つ能はざりしを責めた、而して二人は遂に相爭ふの愚なるを語つて共に悲惨なる運命を甘受するに至つた、彼等は他の凡てを失ふも二人の愛だけは失はじと決心するに至つた。

かくミルトンは人類墮落の心理的解剖をなした、人類墮落の動機及び戀愛のためには凡てを棄て厭はずと云ふ墮落せる人間の心は遺憾なく描かれてゐる、實に人間は―殊に現代の人間は―戀愛の爲には凡ゆる罪を是認せんとするのである、十二節に「さればこれ一人より罪の世に入り、罪より死の來り、人みな罪を犯せば死の凡ての人に及びたるが如し」とある如く、人は皆アダムにありて罪を犯し、またアダムと同じく死するのである、「人皆罪を犯せば死の凡ての人に及」ぶのである、人類が墮落して神を失ひ、男は女よりも又女は男よりも良き者がなきに至つて其醜さが一層明かに現はれるのである、如何にして此墮落より脱すべきか、いかにして失ひし樂園を回復すべきか、ミルトンが其『樂園恢復』(Paradise Regained) に於て説ける如く、そは一にキリストに依てゐる。

前回に引き続き五章十二―二十一節の研究であるが、この箇所は短い言葉の中に深い真理を含ませているため、文章としては不備な点が多く、全体を正確に理解することはなかなか困難である。邦訳改訳聖書は従来訳より正確であるため、これを参考にすることは理解を大きく助けるのである。また前回に説明したように、（第一）人類が一体であること、（第二）神が人類に対してその代表者をもって接すること、この二つの真理はまず心に留めておかねばならない。

十四節の最後に「アダムは来たるべき方のひな型です」という一句がある。「来たるべき方」とはキリストを指す。つまりアダムとキリストが人類の二大代表者であるということである。神は人類の中で最も優れている者としての代表として選ばれたのである。そしてパウロがここで説いている内容は、大体において次の二つに分けることができる。

第一、アダムはキリストの型である。アダム一人の罪によって人類に罪と死が及んだ。同様に、キリスト一人の義によって義といのちが人類に及んだ。前者は死の源であり、後者はいのちの源である。この意味において、二人の人類に対する関係は非常に似ている。

第二、けれども、この二人の人類に対する関係において異なる点もある。その相違点は大体次の三点である。

（イ）アダムは純粹な人間である。これに対してキリストは、神がその独り子を人間の姿で世に送られた者で

ある。

(ロ) アダムによる人類の死は神のさばきから出たものであるが、キリストによる人類の救いは神のあわれみから出たものである。

(ハ) アダムのために人類に臨んだものは死であるが、キリストのために人類に臨んだものは永遠のいのちである。

このように、アダムとキリストは似ていながらも大きく異なっている。そしてその相違は実に根本的な相違である。前者から生じたものは罪と死——永遠の呪いである。これに対して後者から生じたものは、この永遠の呪いを打ち破る義といのちと永遠の祝福である。似ているからこそ前者を真理として受け入れる者は後者も真理として受け入れなければならない。また異なっているからこそ、前者による私たちの死が後者によるいのちによって打ち砕かれるに違いない。したがって私たちの救いは確実である。人々よ、早く来てこの救いを受けよとパウロは勧めるのである（上の第一の類似点を説くのが十二—十四節、第二の相違点を説くのが十五—二十一節である）。

これはパウロ神学だから自分たちには関係がないと言う人がある。けれどもそれは大きな誤りである。まず私たちは旧約聖書において次のような言葉に接するのである。

あなたの神、主であるわたしは、ねたみの神。わたしを憎む者には父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。（出エジプト記二十章

五、六節

天が地上はるかに高いように御恵みは主を恐れる者の上に大きい。東が西から遠く離れているように主は私たちの背きの罪を私たちから遠く離される。(詩篇百〇三篇十一、十二節)

主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。(詩篇百十八篇一節)

まことに御怒りは束の間のちは恩寵のうちにある。夕暮れには涙が宿っても朝明けには喜びの叫びがある。

(詩篇三十篇五節)

わたしはほんの少しの間、あなたを見捨てたが、大いなるあわれみをもって、あなたを集める。怒りがあふれて、少しの間、わたしは、顔をあなたから隠したが、永遠の真実の愛をもって、あなたをあわれむ。――

あなたを贖う方、主は言われる。(イザヤ書五十四章七、八節)

以上の五つは最も代表的なものであるが、他にもこれに類似した語句は無数にある。ヤコブ書二章十三節の言葉を借りれば、これは「あわれみがさばきに対して勝ち誇るのです」ということである。さばきは当然なければならない。しかしあわれみはさばき以上にある。さばきは三代四代に及び、恵みは千代に及ぶ。怒りは一瞬であり、あわれみは永遠である。神は当然怒りと罰を与えなければならない。けれども神は怒りと罰に対して熱心なのではなく、これはやむを得ず行っていることであり、あわれみと恵みについてはまさに燃えるような熱心を起こされる、これが旧約時代からの明らかな教えである。

神のこの心は、今の人間の心と正反対である。腹を立てること、責めること、壊すことには全精力を使いなが

ら、赦すこと、耐えること、建て上げることには十分な力を使わない。すべての惡に対しては熱心を燃やすが、善に対しては最も冷淡である。これは人類の墮落の強い証拠と言うべきものである。このように人の心と神の心とは全く違う。神は怒ることに遅く、恵むことに早い。神は責めることに熱心ではなく、赦すことに熱心である。だから今日の人であっても、神を信じて聖霊を心に迎えるならば、善に対して熱心になり、惡に対して嫌惡を持つことができるのである。

この神の心を知った上で、私たちは十五節を読まなければならない。「しかし、恵みの賜物は違反の場合と違います。もし一人の違反によって多くの人が死んだのなら、神の恵みと、一人の人イエス・キリストの恵みによる賜物は、なおいつそう、多くの人に満ちあふれるのです」と言う。神はアダム一人の罪ゆえに全人類に対してさばきをもって臨まれたが、これはやむを得ず行われたことであって、このことに熱心であるからではない。神の熱心はキリストによる全人類の救いにある。キリスト一人の義ゆえに、恵みの賜物が多くの人にあふれるに至る。ここに神の特別な熱心が注がれたのである。キリスト一人から全人類に生命が及んだということは、神のこの特別な性質を知れば決して理解できないことではない。これが理解しにくく思われるのは、人が自分の善に不熱心で惡に熱心な心を神に重ね合わせて見ているからである。

次に十六節は「また賜物は、一人の人が罪を犯した結果とは違います。さばきの場合は、一つの違反から不義に定められましたが、恵みの場合は、多くの違反が義と認められるからです」と訳すべきものである。前節と同様に、アダムによるさばきとキリストによる恵みとの対比である。前者は全人類が罪とされるに至ったこと、後

者は全人類が義とされるに至ったことであり、この両者の間には天地の差があると言っているのである。つまり、さばき是一个の罪を出発点として出で、賜物は多くの罪を出発点として救いに至ったと言うのである。

次の十七節は言う、「もし一人の違反により、一人によって死が支配するようになったのなら、なおさらのこと、恵みと義の賜物をあふれるばかり受けている人たちは、一人の人イエス・キリストにより、いのちにあつて支配するようになるのです」と。この節の対比は死といのちである。一人のアダムの罪のために死の支配を受けるに至り、一人のキリストの義ゆえに、いのちの中にあつて支配することができに至る。死の支配を受けることといのちの中にあつて支配することとの差は、実に無限大である。アダムのために人類は死に支配されるという不幸に遭つた。しかし神は第二のアダムとしてキリストを与え、その義ゆえにキリストを信じる者には誰であつても永遠のいのちという幸福を与える道を拓かれた。神は罰することに熱心ではなく、恵みを与えることに熱心なのである。

以上によつて、アダムとキリストの比較はほぼ明らかになつたと思う。本當にキリストの救いは大きな救いである。神がもし人類の一人一人が義となつた時に初めて永遠のいのちで報いるとされるならば、人生は永遠の絶望になるほかはない。自分の罪を考えよ。また人類の罪を考えよ。その深さを思い起こせ。人がどうして自分で完全な義人になれようか。各人が自分で完全な義を實現しなければ生命を与えられないとすれば、人は滅亡をその先に見据えるほかない。けれども神は憐れむことに熱心な神である。そのため、その独り子を人間として世に送り、彼に人類に代わつて義を實現させ、彼が義であるために人類もまた義とされていのちを受けるに至る道を

拓かれた。ここに大きな恵みがあり、また人類の寄り所がある。このほかに真に救われる道はない。したがって、このほかに真に安心を得られる道はない。

この義とされているのを与えられる恵みに入って初めて、また事実上義を行うことができるようになるのである。つまり、道徳から信仰に入るのではなく、信仰から道徳に入るのである。義になって義とされるのではなく、義とされて義になるのである。完全な人として扱われる恵みに入って初めて、完全に向かって進むのである。だから第一に必要なことは、イエス・キリストを信じることである。この信仰があつて義とされ、義とされて義になるのである。信仰！これこそ実に現代の最大に欠けているものであり、また最大に必要なものである。どのようにしてこの社会を救うべきか、またどのようにして個々の人を救うべきか、それはどちらも信仰によってである。キリストに対する信仰と従順があるところ、人も救われ、また社会も救われる。まず必要なものは信仰である。

以上をもって第五章十二―二十一節の大意の説明を終える。遠い昔における始祖アダムの墮落は、ついに神の独り子の降世を必要とさせたのである。始祖の罪は人類が受けた最も大きな傷であつた。ただ、これをいやして余りあるキリストの救いがあるため、私たちの喜びは尽きることがない。この両者の対比をパウロは力強く記して私たちに示すのである。今ここで、有名なミルトンの『失樂園』(Paradise Lost)がアダムの墮落をどのように描いたかを見よう。これはローマ書五章の解釈を大きく助けるものである。

ミルトンの『失樂園』は創世記第三章の詩的な解説であつて、始祖の墮落についての最も深い説明と称すべき

ものである。事は第六、七、八、九、十章に詳しく書かれている。まずサタンは蛇の形をとって、アダムとエバを罪に陥れようとする。サタンは男よりも欺きやすい女を選び、エバに近づいて「美しい創造主に似た最も美しいあなたよ」と言つて、彼女に甘いへつらいの言葉をかける。サタンは女が陥りやすい虚栄心と好奇心の両方からエバを惑わそうとするのである。このようにしてエバはまず虚栄心に満足を与えられ、そしてなぜ蛇が人間の言葉を話せるのかという疑問を起こす。これこそ好奇心の生むところである。蛇はエバが思うツボにはまったのを喜んで、ある木の実を食べたために人間の言葉を理解できるようになったと答える。エバは好奇心に駆られて蛇に案内させ、行つてみると果たしてそれは禁じられている木の実であつた。蛇は言う、神がこれを禁じたのは、獣がこれを食べれば人間のようにになると同時に、人間がこれを食べれば神のようになるからである。神は人が自分と同等の者になるのをねたみ、永遠に人を自分に従属させようとしてこれを禁じたのである。だからこれを食べることは少しも差し支えないばかりか、かえつて大きな幸福をもたらすのであると。この巧みな誘いの言葉に惑わされて、エバはついに知識の木の実を食べるに至るのである。

これを食べてみると、案の定、心に言い知れぬ喜びと新しい力が臨んだ。彼女はこの力を使ってアダムと同等、あるいはアダムより優れた者と自分をみなし、アダムをおさえつけようという心を起こした。けれどもまた思い直した。自分はすでに命令に違反したのだから、たぶん罰として死を受けるのだらう。そのあとはアダムには新しい妻が与えられるだらう。これは耐えがたいことである。だからむしろアダムを誘つて同じ罪を犯させる方がよいと（男を屈服させようと願ひながら、また男に頼らなければならない女性の弱さが心理的に描かれている）。

そこで自分の罪をアダムに打ち明ける。アダムは大いに驚き、また失望した。しかし女の愛に引き寄せられて「あなとなしでどうして私が生きていけようか」とついに同じ罪を犯すに至ったのである。

こうして二人はついに墮落した。二人は一時の歓楽から覚めて、失ったものの大きさに驚いた。墮落した状態の惨めさがしみじみと感じられた。アダムは特に激しい失望に襲われた。彼は二人の現状について痛恨のうめきを発した。彼は鋭い非難の矢をエバに向け、彼女の意志の弱さが墮落のすべての原因であるとなじた。エバはこれに對して、アダムの意志の弱さによってついに女の誘惑に勝てなかったことを責めた。そして二人はついに争うことの愚かさを語り合つて、共に悲惨な運命を受け入れるに至つた。彼らは他のすべてを失つても、二人の愛だけは失うまいと決心するに至つたのである。

このようにミルトンは人類の墮落の心理的な解剖を行つた。人類の墮落の動機、および恋愛のためにはすべてを捨てていとわないという墮落した人間の心が見事に描かれている。実に人間は――特に現代の人間は――恋愛のためにはあらゆる罪を正当化しようとするのである。十二節に「そういうわけで、ちやうど一人の人によつて罪が世界入り、罪によつて死が入り、こうして、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がったのと同じように――」とあるように、人は皆アダムにあつて罪を犯し、またアダムと同じく死ぬのである。「すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がった」のである。人類が墮落して神を失い、男は女よりも、また女は男よりも優れたところがない状態に至つて、その醜さが一層明らかに現れるのである。どのようにしてこの墮落から抜け出すべきか、どのようにして失つた樂園を取り戻すべきか。ミルトンがその『樂園回復』(Paradise Regained)

において説いたように、それはひとえにキリストによつてである。